

【松風】 まつかぜ

松の梢を吹き抜ける風、及びその風音を松風といいます。風速により音は異なりますが、あえて擬声語にすれば「ゴー」というところでしょうか。力強い音です。古語には颯颯[さつさつ]という擬態語があり、松風の音に多く使われています。

『源氏物語』巻十八の巻名は「松風」です。源氏三十一歳の秋。源氏の勧めにもかかわらず明石の君は身分の低さに悩み上洛をためらいます。明石の入道はそんな娘のために大堰の河畔に家族と共に住めるよう邸を入手します。源氏も邸の整備に協力するのです。

しばらく紫の上に遠慮していた源氏は、三年後ようやく大堰の明石の君を訪れます。そこで初めて幼い姫君と対面します。

世阿弥改作の謡曲『松風』は月の能といわれています。月の美しい秋の夜、ある旅の僧が須磨の浦で由来ありげな松の木を見つけます。里人に尋ねれば、その松は今は亡き松風・村雨という姉妹の旧跡であるといえます。その松に念仏を唱え、僧は宿を求めて付近の塩屋に立ち寄り、主の帰りを待ちます。

月明かりの中、二人の海女姉妹が帰ってきます。宿りを許された僧は姉妹に松の旧跡を弔ったことを話します。姉妹は涙し、実は自分達は在原行平に寵愛を受けた松風・村雨の亡霊であると告げ、亡き行平への恋慕の念、月を友とし潮汲みの苦勞に耐えてきた身の上を語りはじめます。

語るにつれて松風の霊は思い余って行平の形見の烏帽子・狩衣を身に纏い舞い始めます。須磨の浦の波は荒れ、姉妹の亡霊は回向を乞い暁とともに消えてゆくのでした。

『古今集』在原行平の

・わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ

の歌に想を得ての創作といわれています。

松風が行平の形見の烏帽子・狩衣を身に纏い舞う姿はひととき印象的です。このように女性の役柄が男性の衣装を身に着ける異風は『杜若』『巴』『二人静』『水無月祓』『道成寺』『百万』『卒都婆小町』などにも見られます。白拍子の姿、あるいは恋人を慕う姿としての意味があるようです。

この曲は松風の他、村雨・月明かり・須磨・汐汲・老松・烏帽子・狩衣・颯颯・鹽屋・藻鹽など多くの銘を我々に提供してくれます。

茶の湯の世界で銘で「松風」といえば、宗旦作の共筒茶杓を想われることでしょう。元は村雨とともに二本あったそうですが村雨は焼失し、現在松風のみ藤田美術館に現存しています。ごまの入った竹で筒は草に削り、左下がりの櫛先など宗旦の特徴が随所に見られる茶杓です。もちろん

謡曲に因む銘です。

茶釜のたぎる音を松風と呼ぶことは周知のとおりです。釜の湯のたぎる程度の分類は既に八世紀中頃、唐の陸羽による『茶経』に見られます。一沸(魚目)・二沸(湧泉連珠)・三沸(騰波鼓浪)、それ以降の疲れた湯を老水と名付け分類しています。次いで北宋の『茶録』には蟹眼、『大観茶論』には魚眼の語が見えます。

日本では釜の六音といって、魚目・蚯蚓音・岸波・遠浪・松風・無音。あるいは魚眼・蟹眼・雀舌・小涛・大涛・無声と六段階の区分がなされてきました。釜音を六段階にも分類していたとは驚嘆に値しますね。先人達がいかに湯相に注意を払っていたかがええます。

松風はその内のひとつですが、現代では釜音の総称として用いられることが多いようです。

「閑坐聴松風」の一行は茶趣に適う禅語ですね。

静寂な茶室に幽かに渡る音、点前座に向かう亭主の足袋の擦れ音・茶筌を振る音などには拝聴すべきものがあります。

柄杓からこぼれる湯の音と、やや高い水の音を聞き分けると、不思議と心が落ち着くものです。湯や水は一同が耳を澄ましているとよい音を出してくれるものです。

釜の鳴る松風の音は釜の評価の一要素であり、茶事の進行を主客双方に促してくれる音でもあります。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~